

「We are the hikimi ～匹見という一つの家族～」

益田市匹見上公民館

1 匹見上地区の概要

中国山地の西南端に位置し、1000m級の山々へと続く景勝地、裏匹見峡・表匹見峡を有し、その溪谷美を造り出す広見川・匹見川は本流の高津川を何度も水質日本一の一級河川たらしめた清流である。温暖な益田市の中にありながら県内で有数の豪雪地帯を抱え、中心部の標高は約270m。江戸時代から冷涼な気候を活かしたワサビ栽培が盛んで、昭和50年代には「東の静岡、西の匹見」と言われるほどの生産高であった。しかし近年、少子高齢化・人口減少により生産量は激減。UIターン新規就農者対策によって僅かながら栽培面積の持ち直しが見られるが、「匹見ワサビ復興」への道のりは険しいところである。高地であって寒暖の差も大きいため、水稻や高地野菜の生産も行われており、家庭菜園の生産物や加工品は温泉施設の直売所などで好評を得ている。

地区の面積は約154km²、人口712人、高齢化率57.6%（2018年12月現在）であり、広い面積の中に谷筋ごとに集落が点在する過疎状態であるため、地区の中心部には町内にそれぞれ一つしかない保育所・小・中学校のほか、農協・郵便局・病院・歯科診療所・益田市役所匹見総合支所といった主要施設が集まってはいるものの、衣料・日用品の買い物や専門病院への通院には市の中心部まで約1時間以上を移動しなければならない、高齢者の交通問題は深刻である。

そんな中、伝統芸能である石見神楽の社中が二つあり、後継者不足に悩みながらも地区内外に参加を呼びかけて社中員を増やし、県や市の無形文化財に指定された演目も含めて継承している。

2 事業の趣旨

気象状況の起伏が激しい昨今、自主防災組織設立が強く望まれるところであり、地区民の防災意識を高めるとともに具体的に「助け合い」として何ができるかを見極めておくことは急務である。高齢になっても住み慣れたこの地で安心して暮らし続けることができるよう、防災の専門団体や“人や地域を繋ぐ役割をもつ人”、学校や老人クラブなどの各機関と連携しながら自主防災組織づくりを目指す過程で地域の絆を深め、日常的に住民同士の助け合いや支え合いができる地域になることを目指す。

3 具体的な取組内容

- ① あぶないところマップをつくろう
小学生と地域の大人が現地を歩いて危険箇所を確認し、地図を作る。
- ② みんなで診断 匹見のお助けマニュアルづくり
防災意識を高めるための視察研修
災害時要支援者情報台帳についての意見交換会
- ③ みんなで経験 避難・炊出し訓練
- ④ みんなで知ろう 匹見の防災
防災用具についての学習



(子どもたちによる危険箇所の発表)

4 評価と成果

(1) 参加率を高めるために

新たな事業で住民に負担感が生じないように既存の事業に防災の内容を加え、子どもたちを中心に据えた活動とし、この事業が終わった先に自主的な繋がりができるように、一般の人に加えて防災の専門団体や“人や地域を繋ぐ役割”をもつ立場の人にも参加を呼びかけた。また、老人クラブや学校とも連携し、いろいろな年齢・地域・立場の人に参加してもらった。

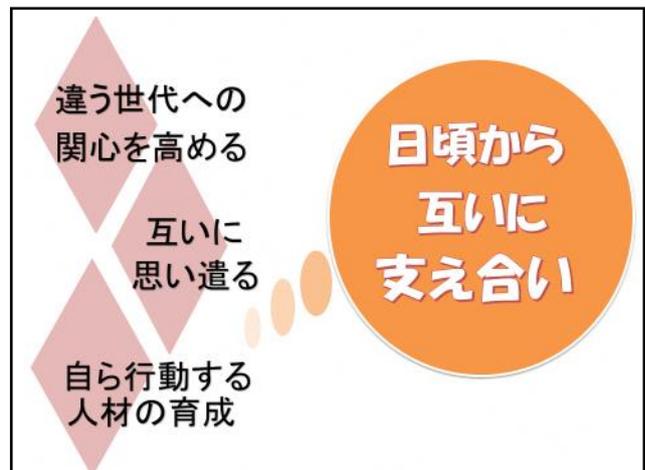
昨年から取り組んでいる「生き行きポイント制度」という、公民館事業に参加して集めたポイントが400円の地域商品券と交換できる制度も活用して参加を促した。

4つの連合自治会がある広い面積をもつ地域であるため、初めは中心地域の連合自治会単位をモデル地域として取組みを始め、それ以外の地区については、各地区内での継続事業の機会を利用して、モデル地区で行った内容についての情報提供や、今回、準備した防災用品の展示、使い方の紹介をすることができた。

(2) 住民同士の絆の深まり

いろいろな世代や立場の人が一緒に活動できたことで、住民個人の防災意識を高めながら違う世代への関心も高まり、お互いを思い遣ることへの気付きが見受けられた。

現在当地区は、UIターン対策の効果もあって、もともと匹見の生まれという児童は全体の3分の1程度であるが、この事業を通して世代を超えて馴染みとなり、他所で出会っても遠慮せず声を掛けられるようになったという声を聞くことができた。当初の狙いである、「災害時だけではない、日頃の住民同士の支え合いが高まること」に繋がったように思う。また、活動の中で子どもたちの存在が大人の積極性を引出している場面も多くみられ、改めて異世代での活動の大切さが感じられた。



(活動の重点項目)

5 今後の課題と見通し

地域住民の防災意識を高めていくためには、各機関から参加してもらうことでできた繋がりを活かし、各機関の横の繋がりが深まるような展開が望まれる。

今年度は、「初めの一步」という感じで、あらかじめ、それぞれが自主的な繋がりを考えられるような「振り返り」や「仕掛け」が弱かったように思われるため、「何をねらうための取組みなのか」をしっかりと考えながら、事業全体を俯瞰して結果に結びつけていく仕掛けを意識することで「人材の育成」を目指す。

当地区では、来年度の地域自治組織設立に向けて準備委員会が大詰めを迎えている段階で、地域の課題を「魅力」「環境」「支援」の3つに絞って解決につながる動きを探っている。「支援」について話し合う場では、自主防災意識の啓発についても話題が出ているため、今回の取組みを活かしながら公民館と地域自治組織が協力・連携を深め、地域として絆を深めるための効果的な手法を見つけていけると考える。

この事業で、多くの参加者が「小さなことでも、誰かのために自分にできることがあると気付けた」ことを次の取組みへ繋げていきたい。

(文責：主事 田代祐子)